

四季寸考



鐵 貞 雄

随 想

早 春

そろそろ雪解けの水の音が高くなる
うとしている山に入る。

ウグイスの声もまだ、それほど谷に
こだまはしない

そのころ、もう陽あたりの良い斜面
の木の根もとのあたりには、イワカガ
ミやカンアオイの花が人知れず咲き始
めているのを見ることができ

イワカガミは、華やかで誰の目にも
とまるが、カンアオイの花は、それと
注意して見なければ、腐葉土や岩や木
の根と見分けなどつくものではない。

マンサクの花だって、よほど山好き
で、その花を心待ちにしていた者にで
なければ、その居所をすぐに明かし
はくれまい。

人を導くという仕事も、一人一人を
見つめる確かな目が必要なのだなど、
そんなとき考える。

盛 夏

アサガオ、ヘチマなど、つるになる
植物は、伸び出したらその成長はただ
驚くばかりだ。

一週間も放っておこうものなら、人
間の意志などと全く関係なしに勝手手
ままだに伸びて行く。

節の間から、日ごと、つぼみのふく
らんでいくのがしかと見分けられる。

地をほうアサガオやヘチマにも趣き
はあるが、垣や棚作りによってそれ
は、随分と違ってくる。曲がったヘチ
マでは風情がなからう。

これはもう毎日の教室の風景と同じ

ようなもので、一人一人の子供の持つ
たくましいエネルギーを授業という形
に組織し、方向づけをしてやることに
似ている。

教師の周到にして適切な手だてが、
子供たちの姿をかえていくのである。

晩 秋

夏の日照りに耐え、精力の強い草々
におびやかされ、あの強い雨と嵐にも
まれながら、どこにこんなすばらしい
生命力を宿していたのであろうか。

キクが庭の隅に頭をもたげ、長身の
ダリアやコスモスが、花梗をしっかりと
立て、鮮やかなそれぞれの色を見せて
くれる。

厳しい条件の中を生き抜いてきたこ

れらの花には感動すら覚える。

この華やかさはどうだ。まるで自然
のひどい仕打ちなど一切忘れている。

人間だって四十人いれば、みなそれ
ぞれ生きた足跡がある。伸びようとし
た努力がある。そして、違った顔、形、
性格を持つ。

そのどれをも、良さを認め、さらに
より良い方向へ導いてやるのが教師の
使命なのだなど、そんなときふと思っ
たりする。

初 冬

ひっそりとした午後の校庭の一隅に
立つ。

サクラが、ウメが、花芽、葉芽をそ
れぞれにふくらまして、春のあのひと
ときを待っている。

今にもはち切れそうな充実した芽か
ら伝わってくる生命の鼓動。

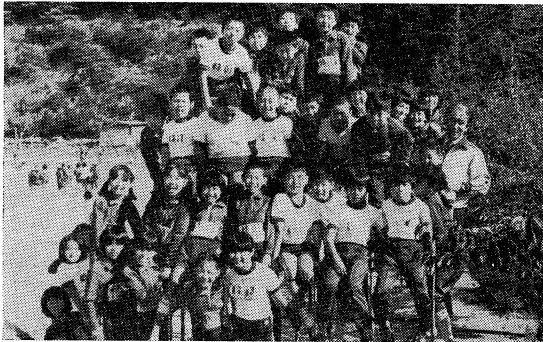
その力を貯えていたのはいつだった
のだろうか。

花に見とれ、葉の色づきに心を奪わ
れている日々、木々は明日への力を
培っていたのである。

子供たちがとどまることなく成長し
ているのと全く同じだと、そんな
とき私は思う。

一人一人に秘められた可能性を引き
出す教育という仕事は、根気のいるも
のだが、楽しいことも多い仕事だなど
つくづく思うこのころである。

(福島市立森合小学校教諭)



たくましく伸びよ